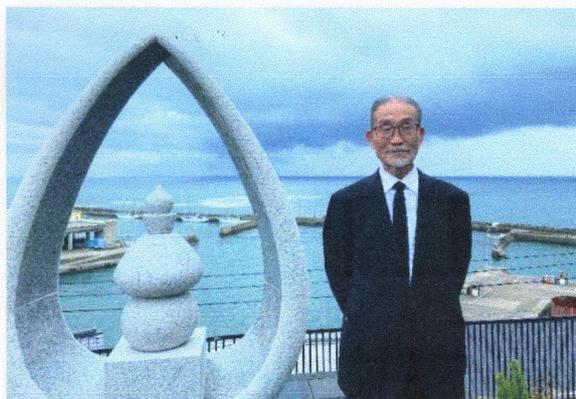


『 海洋葬の環境への影響について 』



東京海洋大学 海洋政策文化学科
客員研究員 山 川 紘 先生

所属部門 産学・地域連携推進機構
学位論文 アワビ類の生態に関する研究
社会活動 漁業者のための資源生物・環境の情報
を明らかにし、現在社会や産業の抱える問題
の解決策、将来の方向性・実践方法を提案する。

日本社会は近年、人口減少や家族形態の変化によって、お寺も檀家制度の変容を余儀なくされる時代となり、市民も都市の周辺にお墓を持つことや維持することが難しくなってきました。しかし、亡き父母や家族を偲ぶという気持ちや、未来を担う子供たちの幸せを祈る心は、これからも人々の文化的な絆や縁を守って行くなかで、大切に育てていくものであります。お墓はこれから一族の社会的な象徴ではなく、家族単位の信頼の証となると考えています。

亡くなった方の弔う方法の一つに海洋葬があります。人間の祖先は海から始まり陸上の生活を得た歴史を持っています。陸の生き物はすべて、どのような形であれ永い時を経て海に帰ることが必然な形です。海洋葬は遺骨（灰）を海に戻す儀式ですから、輪廻にかなっていると思います。海という環境に骨灰を入れることに環境汚染を懸念される方がおられるかもしれませんが、骨灰に“生物に影響する汚染物質”があるのかどうかは、海洋葬を実施する方々には、確かめる責務があります。

火葬場でご遺体を灰にするときに、高温の中でほとんどの成分が燃焼してガスとして空中に散逸してしましますが、炉から出された火葬灰には、慎重に考慮すべき物質「六価クロム」という有機の発ガン性物質が含有されることがあります。これはご遺体がもたらしたのではなく、火葬場の設備や儀装の金属が高温に反応して、お骨や灰に入ってきたものが主です。海の環境に害をもたらさないために、海洋へ撒く骨灰は、無毒の「無機三価クロム」に変換させて、指定されている許容数値にしてしまうことが重要な手順となります。人の骨の主成分は炭酸カルシウムやリン酸カルシウムが主な成分であり、これらは海洋生物の体内に取り込まれたとしても無害の状態でありますし、生物間の食物連鎖を経て取り込まれ、鯨類など大型の生物に移行します。

海洋葬の実施に当たっては、使用するもの全てについて、専門の分析会社に委託し分析結果を確認して無毒化した値を、「公的に記録・保管すること」が責務であります。また、これを機会に妙海寺・ハウスボートクラブの実施事業として沿岸魚類の成分調査を行ってデータを長期に公表されるシステムを作ると、世界的に評価される環境調査定点となることでありましょう。

山 川 紘

2022年3月

宗教法人 正榮山 妙海寺
株式会社 ハウスボートクラブ